



岷江入楚

源磨

卷十二

特別
~ 12
4604
11



7/2
4601
11



須磨

廿五歲

除名

二月十九日

深氏若有厄近

可為二月廿余日

前二日渡右大臣殿

對面伊納言君

若君乳母宰相君侍宮御消息

還二系院西面對

河日渡花女里

還二系院西守

春山山沙

先系入

於海河戶

二系院

申時下

磨浦

小汀文庫

過不江殿

以平中納之德居地

二至元 入及之 尚侍

兵雨之以此使若者其言不宣不

奉直分府之文又自存之文有涉使

見死於里之下涉及終

七月尚侍改系内表

河磨之里秋系氣催京

平智作繪

宮出海之廊

佛法人之誅令

十之有見月思在

疏堂五節書過以海之帝帝清皇

京人之帝之志大將吏

之里冬之亂也

浮中君彈琴

羽石入道史歸相終

六歲

之任中將為宰相

二月花以思都

之任中將任宰相未訪河磨配取

之里洞度

派人秋海津物

宰相作又書

皇約為引之物

二月一日上已種

西國雷鳴

源氏君夢相

酒磨

河光源氏譜看付浦し瓜右之次

三ノ年河為左源氏廿五歳之月廿余日酒磨乃浦

小隠兵一将入而くる年廿六歳乃浦すけ美よみ
えりり 其日

和

是右三河国号し源太之威の二月より此乃し此之
月名さしつゝのりあり昔之の株より太威の着る
のり物換しみよけ内は源の源右のりるありや
柳の着れ束の弘徳殿の造意よりを流まじ定る
もありさるやふのりを和りてみりしは
しつゝ海に接するやし物換のりるあり

国言源太号し此株より太威の二月より此乃し此の
りる源右のりる又此のりるよりしつゝ美は
けるに系五常明友のなしつゝいりしつゝりる

和抄助功と源右一源とく又和官日源師古日
凡言源者去旧官就新官

むし〜人のま〜

美園末より極の〜

人〜花切人〜

唐蓮
唐蓮
唐蓮

勅物云愚業 滔天 尚書堯典 帝曰吁
静言 席 象 恭 滔天 注 滔者慢 象者恭

又云浩 滔天 注 滔大君漫天
美園浩 滔天 滔字 是は人
けくあき〜

美園大 滔天
けり〜 滔天
秘函 滔天

うらひの〜

美園桐 章 滔天 乃 滔天 滔天 滔天
行末 滔天 滔天 滔天 滔天

美園 滔天 滔天 滔天 滔天
滔天 滔天 滔天 滔天

美園 滔天 滔天 滔天 滔天
滔天 滔天 滔天 滔天

美園 滔天 滔天 滔天 滔天
滔天 滔天 滔天 滔天

いれけり

兼中源のいけなるしこいけん花散里美よみあり
そしるけり

兼中源のいけなるしこいけん花散里美よみあり
初つたけり

たのこりしけり

まことりのいけなるしこいけん花散里美よみあり
あつたけり

兼中源のいけなるしこいけん花散里美よみあり

はるき女后男女よりしこいけん花散里美よみあり
と号する藤原尊子と系用白賴女后日流流

天保元年三月十九日落飾せし入道宮
兼中源のいけなるしこいけん花散里美よみあり

物のかつたけり

兼中源のいけなるしこいけん花散里美よみあり
人二惟と不道とをいけり

くねるしこいけん花散里美よみあり

佛のいけり

兼中源のいけなるしこいけん花散里美よみあり
いけり

兼中源のいけなるしこいけん花散里美よみあり

兼中源のいけなるしこいけん花散里美よみあり
いけり

兼中源のいけなるしこいけん花散里美よみあり

兼中源のいけなるしこいけん花散里美よみあり
いけり

兼中源のいけなるしこいけん花散里美よみあり

之月けり

西宮庄名長安和二年三月廿一日たけり
兼中源のいけなるしこいけん花散里美よみあり

兼中源のいけなるしこいけん花散里美よみあり

兼中源のいけなるしこいけん花散里美よみあり
いけり

河 細休車し 葉花物語云あやしのわら車うて

久よかつて後ね体内大臣危子の時のあし

葉中よ女の葉切しる車し人よあまの時のあしはな

て人し礼うしうまの物し

沸るうしうまの物し

初 素上の位孫し川うし

りる君の川めのと

秘 久急方のめのとし 久急方け時の歳し

びしうまの物し

葉中よ素上の宿めし素巻よけりあり

りるうしうまの物し

葉中よ危うく人のふうらうしうまの物し

世のつひるまふ

葉中よ素上のめのと又原のめのと

わらう君のうしうまの物し 秘 久急方し

ふれうまの物し

葉中よ礼し 塵危ト上座とのうしうまの物し

りるうしうまの物し 唐よもせようらう

るしを君けりるし 打しける神に唐ねるうし

久しうまの物し

久し見孫をぬく久急方の思ふは孫をぬくおぬぬ

思ひさげり

原の久急方しうまの物し 原のうし

と家しうまの物し

葉中よ

葉中よ

秘 危右臣の相原の除名せしけし出はるりるうし

葉中よ老者年作るし人の相は似合りる原葉

原のめのとしうまの物し 葉中よ

或抄原の除名せしけしうまの物し

りるうしうまの物し

くわんとし

兼中との位のみし位よりあつた

何れは辞官不降位之階位とてむる最料ある時
の事し且位とてむるとあるの件

史記秦本紀注曰如淳曰韋有爵而罪奪爵以皆
稱士位とつるは唐朝は位と辞とてありしは
見貝觀政要或は位とて位とてふまゝとて位と

し台位是階とて和語とありのくわんとし
不審とてつるは貞觀政要云玄奘自以居端檢十

有五年頻表辭位優詔不許十有六年進拜
司空玄奘復以年老請致仕

くわんとし

腰と居するは官仕の礼にまゝとてのあらは休退の
態并せる人のあつてありくわんとしとのすゝ

右の可く致仕の表はくわんとしとて退官は

あつたわんとしとてありくわんとしとて

河海の退休とありたをくわんとしとて

いづくかまゝとてくわんとしとて

此例なるれに言理の罷はありとて

くわんとしとて

何れは強 伴務物流云つらとて

とありの執行云すくわんとしとて

早業早業とて物なるるん

か 兼中との位のみし位よりあつた

初 奏上のよしをねしむの初し 拜日
りゆりせむし

義中が義の存生の時をいひいりほのよめたるは

私 奏物ちり初し

私 奏物ちり初し

初 奏上し 徳文四の中より初し 出後ふつとよし 義中曰
るつとよし 義中曰 聖道 十ツサツ 義中曰

初 奏より初めたるは 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

初 奏上し 義中曰 義中曰

思ひはかち中納言の君

私奏れめ房

兼中納言より原中納言へ書と申の御返事

とて

兼中納言の御返事

秘中納言と申の御返事

手秘中納言の御返事

日ついでふくかきふく西の御返事

ついでふくかきふく西の御返事

人へ書はわかれ

とて

中納言の君

秘中納言の御返事

秘中納言の御返事

あり月の御返事

兼中納言の御返事

高唱をたす日と月をいひかへり

とつたる本にけれしとらるるを

私と月の兼中納言の御返事

とて本にけれしとらるるを

よつてけれしとらるるを

うすく書方とて

兼中納言の御返事

兼中納言の御返事

又比対面の兼中納言の御返事

兼中納言の御返事

又兼中納言の御返事

秘中納言の御返事

とて

兼中納言の御返事

とて

ゆとて

中納言 其れは海に
けり 其れは海にのり
兼中 夕暮の乳ぬ

夕暮の海に
秘 夕暮の海に
秘 夕暮の海に

兼中 夕暮の海に
夕暮の海に
秘 夕暮の海に

兼中 夕暮の海に
夕暮の海に
秘 夕暮の海に

兼中 夕暮の海に
夕暮の海に
秘 夕暮の海に

兼中 夕暮の海に
夕暮の海に
秘 夕暮の海に

兼中 夕暮の海に
夕暮の海に
秘 夕暮の海に

兼中 夕暮の海に
夕暮の海に
秘 夕暮の海に

兼中 夕暮の海に
夕暮の海に
秘 夕暮の海に

兼中 夕暮の海に
夕暮の海に
秘 夕暮の海に

兼中 夕暮の海に
夕暮の海に
秘 夕暮の海に

兼中 夕暮の海に

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘

秘宗お初し 弄月

いれとるくわれとるし
美由わんれとる物いつしとる物し今申も今却
のてらち別いししもわ

あつしにわり

美由大宰相書れし

お大宰相書れし

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

入る月

美由大宰相書れし

とらねはしめはるにわ

河虎狼 存子にらるの虎狼とらる

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

美由大宰相書れし

とらねはしめはるにわ

かきつらぬのむらうと都は申と出張つれりき人の地
ははらふとくしよのそと

●葉中ノその樹のまぬらひふら福も都の長孫
よら名もつらつらとくするんそとをさうけし
とりうへおのれのみ

原の鳥このふも葉のとりふとくとりさうけし
ゆいさうさうなむあつり

奏とこのつこのふ

必二葉院し昇

あつりわしき

二葉院あつり原の鳥か東乃ぬし

まらまはらむさう

原とすらあつり又地ねしわしはあさ

さうさう

必殿し昇

●葉中ノ二葉院のあつり格あつり信長長也あつり
うらうらあつり

んまうけし

原の鳥このふも葉のとりふとくとりさうけし

あつりわしき

さうさう

原とすらあつり又地ねしわしはあさ

さうさう

じまうさうのそと

●葉中ノ門が零落鞍馬稀馬車此法うする

は物あつりさうさうさうさうさうさうさう

せうさうさうさう

原の世人のちとれあつり

あつりんさうさうさうさうさう

必あつりしよわり葉中

花其の盤さうさうさうさうさうさうさう

らうさうさうさう

あつりんさうさうさうさうさう

世にあらざるにありては、
私にたれがかりしものか、
あつたにせよ、
なすけらるるもの

世にあらざるにありては、
私にたれがかりしものか、
あつたにせよ、
なすけらるるもの

世にあらざるにありては、
私にたれがかりしものか、
あつたにせよ、
なすけらるるもの

世にあらざるにありては、
私にたれがかりしものか、
あつたにせよ、
なすけらるるもの

私に公東ひろくわふと云ふ

禁御抄云

勅勅 云凡位不見天氣閉門し布衣化
としに降名なりしに勅勅しれり

あますらちけし

兼中犯罪をせしむる世の度よりあるは
配流するはしむるは遠居をせん人の思ふ人
すむらわらむるは配流の人より及む
しにしむる

兼中犯罪をせしむるは遠居をせん人の思ふ人
すむらわらむるは配流の人より及む
しにしむる

兼中犯罪をせしむるは遠居をせん人の思ふ人
すむらわらむるは配流の人より及む
しにしむる

京のありし罪のつらき事府(配流)に例わり
日あつるもの

兼中犯罪をせしむるは遠居をせん人の思ふ人
すむらわらむるは配流の人より及む
しにしむる

兼中犯罪をせしむるは遠居をせん人の思ふ人
すむらわらむるは配流の人より及む
しにしむる

兼中犯罪をせしむるは遠居をせん人の思ふ人
すむらわらむるは配流の人より及む
しにしむる

兼中犯罪をせしむるは遠居をせん人の思ふ人
すむらわらむるは配流の人より及む
しにしむる

兼中犯罪をせしむるは遠居をせん人の思ふ人
すむらわらむるは配流の人より及む
しにしむる

兼中犯罪をせしむるは遠居をせん人の思ふ人
すむらわらむるは配流の人より及む
しにしむる

このわけのやうや

原の綱堂への後

。築園鏡よりうくる人のふるまひ多しようつる物
しるしは雲つとひ後か

いと悲しい

原ノ心

ほ 身はうつてふはつたねとも思つたりはら後の子はそれ
か給辨 其うは行不止し又流浪モサスラ

仁源 伶俦 又龍鐘 夕ヨフナト云

。築中才力これと流落^{サトサト云ナリ}しけりあわたりと

走はるるふと後れ^{を其に}れし物んとし

よりれし^{を其に}れし物なりとみと

築中才力^{を其に}のけはるれとありはれ

のと海つし^{を其に}し物なりとみと

しるしは雲つとひ後か

いと悲しい

。築中才力これと流落しけりあわたりと

れりしとみと後れし物なりとみと

業をよみし物なりとみと

みこわつれつる物なり

。築中才力これと流落しけりあわたりと

えりし^{を其に}の物なりとみと

途路^{を其に}の物なりとみと

花らし^{を其に}る物なりとみと

そ^{を其に}の物なりとみと

か^{を其に}の物なりとみと

そ^{を其に}の物なりとみと

か^{を其に}の物なりとみと

そ^{を其に}の物なりとみと

養の又^{を其に}の物なりとみと

つ^{を其に}の物なりとみと

業^{を其に}の物なりとみと

つ^{を其に}の物なりとみと

業^{を其に}の物なりとみと

つ^{を其に}の物なりとみと

業^{を其に}の物なりとみと

花^{を其に}の物なりとみと

さらん対とわたりての神

殿乃らつてつとせつる

○業中を散里に神へふりてわたり

月かりり

日おのふゆ

池ひろくは本ふつさつり

○業中をのふゆはとて信を教へんおのふつらやを

としふのふのらと着て人あるまじくすして旅の

舟のあつらいつるんとするやう後すいふおの申あ

川弁忠隠舟一後しんおのふとてふ

あかりてふ マを散里とのふゆ

くしとつり後いさや

○業中をこれとてふとてふとてふとてふとてふ

とわとてふと卑下とてふとてふ

くらあつらひ後つる

○業中を原のふゆ

わたりつて

らへんをまららるるといふふゆ

やう月をみくわを

○花散里の月を物つとてふみくわ

○業中を散里にのらつて神へ物を奉ぐ

と本一のやう後つて又ふたつてとてふ

ふは御地とてふのふゆ

○業中を御地とてふとてふとてふとてふ

てふとてふとてふとてふとてふとてふ

みしかの物れをとや

○原の月

とてふとてふとてふ

○業中をあつらひて何とてふとてふとてふ

悔るり川弁に及ぶるれふ及川弁の石河海平男

○業中を悔るりて後つてとてふとてふとてふ

とてふとてふとてふとてふとてふとてふ

さしつらひつたのふゆ

月夜をば雲の影のほたるりてあはれすしとて
とて月をばほたるりてあはれすしとて

いととにほたるり

必死散屋にこそあはれすしとてあはれすしとて

うれたうりてあはれすしとて

本末をば

切やうしほぬすしとて月影のほたるりてあはれすしとて

あはれすしとてあはれすしとて

業字月影に入ると又いつてあはれすしとてあはれすしとて

のちとてあはれすしとてあはれすしとて

ねたうりてあはれすしとてあはれすしとて

秘昇川舟

私にちやうしほぬすしとて月影のほたるりてあはれすしとて

とてあはれすしとてあはれすしとて

うれたうりてあはれすしとてあはれすしとて

とてあはれすしとて

業字をば雲の影のほたるりてあはれすしとて

とてあはれすしとてあはれすしとて

業字をば雲の影のほたるりてあはれすしとて

とてあはれすしとてあはれすしとて

とてあはれすしとて

とてあはれすしとてあはれすしとて

とてあはれすしとて

とてあはれすしとてあはれすしとて

とてあはれすしとて

業字をば雲の影のほたるりてあはれすしとて

とてあはれすしとてあはれすしとて

とてあはれすしとて

業字をば雲の影のほたるりてあはれすしとて

とてあはれすしとてあはれすしとて

とてあはれすしとて

又業字をば雲の影のほたるりてあはれすしとて

第廿中務中將の業此の方へ参りてふ所
とてこれ其後の後つよつとて業(参る)後つ
いのらありていせよ
又原の初と
又世と方と

ふみしと船のりか船後
原のつれづれとていふ事
いなるもこれのりせ後つとていふ事
あつとていふ事
わつとていふ事
又事相ある事
夕暮のめれとていふ事
死らるる事
又花散星とていふ事
かしていふ事

第廿中務中將の業此の方へ参りてふ所
とてこれ其後の後つよつとて業(参る)後つ
いのらありていせよ
又原の初と
又世と方と

内侍つとていふ事

中務(原)のりか船のりか船後
あつとていふ事
とせ給ふ事
又しとていふ事
いふ事

又原の初と
又世と方と
又花散星とていふ事
かしていふ事

第廿中務中將の業此の方へ参りてふ所
とてこれ其後の後つよつとて業(参る)後つ
いのらありていせよ
又原の初と
又世と方と

思ふにふくむるすまひ

宇去多つかへ家も通わりて此の生れ後

ふれ御休めよとて

又春風の心ゆかし私うねれり

あんなようにうらやまふれはるるあまの

なしてせいの心はほろろ後や

ふれにまねり

又是のあつかし

あまの後つらき

ふれにせよとてゆめはる

ふれにせよとてゆめはる

御らよまらりて

おら後とてふれ 平松日原の扱

とみや物とてふれ

あまの無のむせり

みしきくわりの心

何れ

あつたまの心はるるあまの

ふれに後院二の原乃

私うねりて

ふれにせよとて

ふれにせよとて

あまの心はるるあまの

ふれに後院二の原乃

私うねりて

あまの心はるるあまの

ふれに後院二の原乃

私うねりて

あまの心はるるあまの

ふれに後院二の原乃

私うねりて

あまの心はるるあまの

ふれに後院二の原乃

私うねりて

あまの心はるるあまの

さらなる... 花散... 或抄... 右田...
さらなる... 花散... 或抄... 右田...
さらなる... 花散... 或抄... 右田...
さらなる... 花散... 或抄... 右田...

右田... せいの... 花人

中川の... 養老... 必...
中川の... 養老... 必...
中川の... 養老... 必...
中川の... 養老... 必...

私... 叙...
私... 叙...
私... 叙...
私... 叙...

乞... 殿... 日...
乞... 殿... 日...
乞... 殿... 日...
乞... 殿... 日...

解... 任...

佛... 由...

右... 由...

下... 今...
下... 今...
下... 今...
下... 今...

右... 流...
右... 流...
右... 流...
右... 流...

非... 先...
非... 先...
非... 先...
非... 先...

必... 先...
必... 先...
必... 先...
必... 先...

源うき世と今そりてしとまらん君とみえはれはるる
聞古身かこしはまねとみえはるる母と母らん君とを
あさいらふなだしとてはれはるる母と母らん君とを
地うきとまらりつとてはれはるる母と母らん君とを
ねりまらしとてはれはるる母と母らん君とを

後(源のま)つとてはれはるる母と母らん君とを
つとてはれはるる母と母らん君とを

四十善帝王は後し生とつとてはれはるる母と母らん君とを
つとてはれはるる母と母らん君とを

源のいもはれはるる母と母らん君とを
つとてはれはるる母と母らん君とを

ありしとてはれはるる母と母らん君とを
つとてはれはるる母と母らん君とを

源のいもはれはるる母と母らん君とを
つとてはれはるる母と母らん君とを

東まらしとてはれはるる母と母らん君とを
つとてはれはるる母と母らん君とを

今者つとてはれはるる母と母らん君とを
つとてはれはるる母と母らん君とを

奉命
をよむ
りた
ま

界

今丁巳春又ふあゝぬゆの川れりたむさく
いほつ又まほまを津らん時じするまいつりり

聞者もまふ事記のまよいつるあいはんとも我の時
うしろつらうのまよ

はらりすまじりとも散漫に春日
うくるんと

王命ぬの冷下りせらるる

おふれり川らるる
冷のあさるらんよまあいらはるる廿時入蔵したは
川らるる 命ぬのふま下り

東ま申さるるの啓するこりし 帝王の奏するこ
ころのあはるるこりし 帝王の奏するこ
冷の川詞 ねさるるあはるる川
しめるる川の川らるや 王命ぬのふ

あはれなるる

是より命ぬのふま藤つと徳との間たふと文
くまらるるはくは

物かりいるる ねさるるあはるる川
源と別はねさるるふまのあはるる川

源のよりるあはるる我も人も物もあはるる川

わが謀るるあはるるはくは
後捕も命ぬのかりるるあはるる川

川らるるあはるる川
あはるるあはるる川命の文れ川
あはるるあはるる川命の文れ川
あはるるあはるる川命の文れ川
あはるるあはるる川

命奴

命奴のむねはなほ

必^{命奴}花の雨落と原の葉腐る比ぶるこ又うん去とこれ
らにとよぶるり 弄句

私行着はとくはし之を去るれは原れ故をるれ後よ
そつこつとまむむの時ふるれは故を花の故といふ
まこつと四信んせりと疑しつこりある

時しあらん

むすの河まきししあらんみつし侍守

矣川平東見し月し

又時あつたやうくうう後(のん)

名妙しあれるり

命奴のさぬ

あまのうらあひなけい(は)

一とく

ほつてあつたみもあつた人い

ねさめみのはや

必^{命奴}いさ者この字不信不圖といふる

河にさめ八甲抄六下女とあり 水原抄云るさめとは

曹司事と清河といひまはれし又あつた

女川といひりらとつた高人といつたなつた

女とつたまはれし 案く云行幸後騎 厠長女洗

女とつたあわけし

仁源をさうめさつた

いれつたさつたあり

曹司と御河といひしを海に人統し入るつれと

大原の家の執行の人と 愚案云る

とらり執行のまはつた又川さだか

あり西厠人といつたや記帳するも長女川厠人

私共ある

川つら

必^{命奴}皆原の川つらみの下るる

私にうらみはしむるはかりしるくけり

かたし世の人々

これら忍ぶ人の心原をわきまをせしむるは

必し除名状申付しむるは

或抄に原の申すところ十字に入強てしるは

とて七言少く文つて免れられぬは

さうしむるは

私にけし甚然しむるは

さうしむるは

少く母方家よりしむるは

後世に七歳の行しむるは

ひ後しむるは

その御つしむるは

原の申すは

をんとしむるは

いづれに官位をせしむるは

さうしむるは

大后のいらしむるは

いづれに

せむつてけしむるは

をいづれに

んとしむるは

すしむるは

力をすしむるは

世のいづれに

いづれに

いづれに

秘世のいづれに

いづれに

いづれに

いづれに

私 廿日未下向し 弄月

うらみの出るるし

原の後のあつちくのふゆ

月つらまきりな

私 としつてしつら孫し 中ち原の初し

いよまにもつふゆりなり

とらけられ孫てやうし又の孫は

いよまにもつふゆりなり

わつこかくてそられせし

原の名申し業のゆりて

わつこかくてそられせし

弄原出のるるし みのまに世ふこよふ

私 くさあふまけをまな孫し

いよまにもつふゆりなり

原 いよまにもつふゆりなり

松
いよまに
いよまに
いよまに
いよまに
いよまに

或は夫は此後却のりたか
後つるるるるるるるるるる
そくくくくくくくくくく
念は計の後の日頃は
命のつらまきりな
のうらむみまきりな
とらけられ孫て

私 廿日未下向し 弄月
うらみの出るるし
原の後のあつちくのふゆ
月つらまきりな
私 としつてしつら孫し 中ち原の初し
いよまにもつふゆりなり
とらけられ孫てやうし又の孫は
いよまにもつふゆりなり
わつこかくてそられせし
原の名申し業のゆりて
わつこかくてそられせし
弄原出のるるし みのまに世ふこよふ
私 くさあふまけをまな孫し
いよまにもつふゆりなり
原 いよまにもつふゆりなり

せらるゝ此があれはよの命がわいへぬを此れおし
命よつゝ一服を此原の生草にのめぬと探ふ
やとふふよみう長れうるううや又と白と老
川府録とよのむが此内海戸のんてけうとれう
え林の葉をかうめまのこれわれとてあててお
けよとれあかほるん
世の中をれまけけれとてあててお
後つゝ原の中

いふまじく後ね
原のおまはれれや け程のわうはしるくさうらるる
さうとあさうくと面白くうたるせり
而永よのう後ひね

弄弄院川弄院川
何系略々
日るうに比るれわい風ふんさひう

和和わさうりまの東るるれ久幸よのそみうさうがく
このまじ

弄弄一日は情浦ふら名のあさる着 従ふまじのまじ

かみうさうゆるん
関去也風をさうとけうとてさうとて神
或お日るうに比るるよとてい風ふんさひうとてま
うらまはるれわいあさうめゆの名れや

ねをさうしひれふんさひうとて日るうに比るれまじ
此のまじとていふ印とてまじ
わらさめたるえとてさうとてい

ねを流るるものまじとていふるの縁とてなすい後ね
まじとていふるまじとていふるの浦とていふる
後ふん中とていふるまじとていふるの縁とていふる
まじとていふるまじとていふるの縁とていふる
おあえよのとていふるまじ
と麻王海東の時海勢とて意て大和海とていふ後ね

十一月申長至夜 二千里外遠行人若為独宿楊梅館

今枕單床一病身 白氏文集

伴行人 三千里外随行李 十九年回任轉蓬 在昌賦嶺武

弄 三千里外随行李 一宿三千里外十二之里ハ一ノ此月

秘ハニ千里ハ一ノ此月

ののーつーいふー

何のゆへにうらなぬ女のとけらぬのこのころ 変人

我うへよなやそとくろりま何とー

弄 後のんもあふー け行面白ー 秘月

因去け夕へうらくるる

少くもとくろりの葉うるうつれらるるこころやあはるや井の

秘が せし井のいやあうるし 今の物もあはるるや井の

日ーを井の底とらんくもあはるるや井の

了うぬ地るらん 秘 けのんよいふとけらぬとれをんら地るらん

りーヤ思鞍後の感慨ふらふ

私古今よらうらなぬ感慨ふらふ

まふらんこころあはるるや井の

こころあはるるや井の

海がこころあはるるや井の

おらにうらな平の申納の

ゆへにの西村よらうらな平の申納の

ゆへにの西村よらうらな平の申納の

秘 先うらな平の申納の

業はゆへに海とて 川は昔ノ水もあはるるや井の

見ゆへにそれとらんくもあはるるや井の

いふにうらな平の申納の

私に業奥にほふらん

たのふらうらな平の申納の

●葉守原のほのみすしほらね柳海糸はらほしやあし
るるるあああけりるる

秘曰——
あまのつばき

あまのつばき 柳

●葉守原のほのみすしほらね柳海糸はらほしやあし
るるるあああけりるる

あまのつばき 柳

あまのつばき 柳

あまのつばき 柳

あまのつばき 柳

●葉守原のほのみすしほらね柳海糸はらほしやあし
るるるあああけりるる

あまのつばき 柳

あまのつばき 柳

あまのつばき 柳

あまのつばき 柳

あまのつばき 柳

あまのつばき 柳

あまのつばき 柳

あまのつばき 柳

か
大いなるものなりとてはなれども
つらなるれゆにまじりてはなれども
華國に居るのあまよきつらなるものなりとてはなれども
しつとちあつたはなれども
私にこそはなれども
松平の御女はなれども
相違なきはなれども
唯しつとちあつたはなれども
つらなるれゆにまじりてはなれども
華國に居るのあまよきつらなるものなりとてはなれども
しつとちあつたはなれども
私にこそはなれども
松平の御女はなれども
相違なきはなれども
唯しつとちあつたはなれども
つらなるれゆにまじりてはなれども

か
みよなるものなりとてはなれども
つらなるれゆにまじりてはなれども
華國に居るのあまよきつらなるものなりとてはなれども
しつとちあつたはなれども
私にこそはなれども
松平の御女はなれども
相違なきはなれども
唯しつとちあつたはなれども
つらなるれゆにまじりてはなれども
華國に居るのあまよきつらなるものなりとてはなれども
しつとちあつたはなれども
私にこそはなれども
松平の御女はなれども
相違なきはなれども
唯しつとちあつたはなれども
つらなるれゆにまじりてはなれども

其ほのりつゝし

田舎のこの湯し 勝月夜し

わさし のまのりつゝし

勝月夜しのりつゝし

申納くま勝の昔居はれんし

申納くま勝の昔居はれんし

申納くま勝の昔居はれんし

申納くま勝の昔居はれんし

原のこのりつゝし

しそ又申納のこのりつゝし

いふぬらちやほそとむい

私云秘系然し

私云秘系然し

私云秘系然し

私云秘系然し

○ 兼字法中 けり兼点とをさく

あり又句はあつた

兼字 兼子の持せ

兼字 兼子の持せ

兼字 兼子の持せ

兼字 兼子の持せ

兼字 兼子の持せ

兼字 兼子の持せ

兼字 兼子の持せ

兼字 兼子の持せ

兼字 兼子の持せ

兼字 兼子の持せ

兼字 兼子の持せ

兼字 兼子の持せ

兼字 兼子の持せ

兼字 兼子の持せ

兼字 兼子の持せ

兼字 兼子の持せ

兼字 兼子の持せ

つらやまのつらやまのつらやま

つらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

つらやまのつらやま

いぢりてゝさきりあわ
りれてゝるわいんこつらんさうりあむ世れ命とさす
業守こほは勅とての店通し却勅物のは
つとまこしとてと徳兵衛の身るれは格うつてい
んちをいよしや

入道の文一

業守冷のいしりてほととぎす後よめよあつたの
ありーるりや

業守ほむきと客道のゆきあつたのん
とびつゆのさし

こつら下のいんまをほばとのぬるさひの
よめゆのさしとて行こや

業守ほむあつたのぬるさひのぬるさひのな
りれあせとてい

なまげわらうにみきよ

こしあつたのぬるさひとてい
つけしほむあむさうぬとみあるゆきと世の人の
あいつれとさかへありとてほとあはれあ
わしとさかへありとていぬとあむさうぬと

つらりあつたのぬるさひ

業守ほむあつたのぬるさひのぬるさひのぬるさひ
こののほむさうとていぬとあむさうぬと
あまつたの場悪のぬつとていぬとあむさうぬと
人のさうぬ

やみぬるさうの人のぬるさひ

あまつたのぬるさひのぬるさひのぬるさひ
あまつたのぬるさひのぬるさひのぬるさひ
あまつたのぬるさひのぬるさひのぬるさひ

人の若れ御返よ、 勝月

を勝月夜
いづれもあはれはさうまつしむるはあはれなりよ
も風とくくゆる極れまむてけりしは極れし
今業後撰のそとをひきしりてある

并
私
く極れもまゝ給つてし我力のこころは極れ
しうくくゆりしひるし

。業圃も極の海にわたり極れもまゝつしむるはあはれよ極れ
てあはれやいし思ふやいよの極れしはまゝ
いづれもあはれはさうまつしむるはあはれなりよ
圃も極の海にわたり極れもまゝつしむるはあはれよ

見しはあはれはさうまつしむるはあはれなりよ
私と極れはさうまつしむるはあはれなりよ
はの論争のあはれなるはさうまつしむるはあはれなりよ

うれが申しつてあはれなりよ

申納を極の海にわたり極れもまゝつしむるはあはれなりよ
にわたりしはあはれなりよ

原れを極の海にわたり極れもまゝつしむるはあはれなりよ
わたりしはあはれなりよ
はの論争のあはれなるはさうまつしむるはあはれなりよ

。業圃も極の海にわたり極れもまゝつしむるはあはれなりよ
わたりしはあはれなりよ
はの論争のあはれなるはさうまつしむるはあはれなりよ

。業圃も極の海にわたり極れもまゝつしむるはあはれなりよ
わたりしはあはれなりよ
はの論争のあはれなるはさうまつしむるはあはれなりよ

そのほくしあひらん

秘伝わたりいひしきし

秘傳しきし人

秘傳又母よりほせらんふし

秘傳みらふしとれぬ

秘傳子のちゆらめらとむるやうきれ

秘傳人のあやふらんをまわしむる

秘傳とらふらむるきんふのゆり

秘傳夫婦の申つ後大切なる

秘傳義同

秘傳人のあやふらんをまわしむる

秘傳由とやふらふらむる

秘傳草子地

秘傳同去世朝夕言のあやふらん

秘傳初又後言のあやふらん

秘傳夕言のあやふらん

秘傳のあやふらん

秘傳てたりとらふらむる

秘傳皆らむらむる

秘傳傳とらふらむる

秘傳此傳のあやふらん

秘傳此傳のあやふらん

秘傳ふりつ

秘傳此傳のあやふらん

秘傳とすまふ

秘傳いぬらむ

秘傳此傳のあやふらん

秘傳此傳のあやふらん

秘傳あけぬ

秘傳此傳のあやふらん

正身此の... 智

... 月

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

正義... 又... 二...

正義

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

... 心

ねとまうく文ノ詞し

ねとまうく山見下ノ文ノ詞よくしとては源は伊勢もこれ

入家山見下

いせしよやと不いれしよよあさりてしよしよはたはらや
舟我身なりまうともあるよ源氏定て後流しきり
と有つしよとふふあり

後りつてつあたる面白 源さうり有て後流しきり
かきつしよとたつたしよしよ

因去あたるる求食し因たるたとせしよしよ

物とわられしよ うちとにらつてしよ後流しきりしよいぬし

山見下乃文のさぬ物とわられしよつてしよしよしよいぬ
くしよしよ後流しきりしよいぬしよしよしよしよしよ

しよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ
わられしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ

八能書

ね源ノん中ノ山見下とわられしよしよしよしよ

つりしよしよしよしよ

もわられしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ

ねまますふと

源のうしとわりつてしよ山見下し文とるしよしよしよしよ

いしよしよしよしよしよ

源のうしとわりつてしよ山見下し文とるしよしよしよしよ

いしよしよしよしよしよしよ

行りしよしよしよ

つれくるる源をぬいれしよしよしよしよしよしよしよしよ

ありしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ

るしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ

しよしよしよしよ

しよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ

わつやふふしよしよ

山見下ノ山見し 因去しよしよしよしよしよしよしよしよ

るしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ

くわられしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ

所見所の御使所前見とつていつるかたの人のあはれ
後にはししとつたり

御見所の御使に
とのあふりしるをさし
因去るま子れ地し

くせとらるるついで
秘源の文の初くつてよ有つてあつと存つてつたり侍
らる所宮(所)と申して御勢下はつて地とつて
ついでつたり

つれつとらほそつたり

秘源の文の初くつてよ有つてあつと存つてつたり侍
らる所宮(所)と申して御勢下はつて地とつて
ついでつたり

秘源の文の初くつてよ有つてあつと存つてつたり侍
らる所宮(所)と申して御勢下はつて地とつて
ついでつたり

河内俗 伊勢人

いせ人のあやとつて地をわたりつてあつと存つてつたり侍
らる所宮(所)と申して御勢下はつて地とつて
ついでつたり

いせ人のあやとつて地をわたりつてあつと存つてつたり侍
らる所宮(所)と申して御勢下はつて地とつて
ついでつたり

いせ人のあやとつて地をわたりつてあつと存つてつたり侍
らる所宮(所)と申して御勢下はつて地とつて
ついでつたり

いせ人のあやとつて地をわたりつてあつと存つてつたり侍
らる所宮(所)と申して御勢下はつて地とつて
ついでつたり

いせ人のあやとつて地をわたりつてあつと存つてつたり侍
らる所宮(所)と申して御勢下はつて地とつて
ついでつたり

いせ人のあやとつて地をわたりつてあつと存つてつたり侍
らる所宮(所)と申して御勢下はつて地とつて
ついでつたり

物故よきあわしつらとくいつくつとあつたあ

花らるるあしめ
これと東(文)とあつたあしめ時源も文あつた

花らるる星はれこのあつたあしめあつたあしめ

めすれあつたあしめ
第(一)回より一巻まで

松葉園花散星あつたあしめあつたあしめあつたあしめ

あつたあしめあつたあしめあつたあしめあつたあしめ

あつたあしめあつたあしめあつたあしめあつたあしめ

あつたあしめあつたあしめあつたあしめあつたあしめ

あつたあしめあつたあしめあつたあしめあつたあしめ

あつたあしめあつたあしめあつたあしめあつたあしめ

あつたあしめあつたあしめあつたあしめあつたあしめ

あつたあしめあつたあしめあつたあしめあつたあしめ

あつたあしめあつたあしめあつたあしめあつたあしめ

あつたあしめあつたあしめあつたあしめあつたあしめ

あつたあしめあつたあしめあつたあしめあつたあしめ

あつたあしめあつたあしめあつたあしめあつたあしめ

あつたあしめあつたあしめあつたあしめあつたあしめ

あつたあしめあつたあしめあつたあしめあつたあしめ

しらぬさつてしるるる

花散の任給るの修理れと京の御司律のせさ

かんの若人

秘 勝月夜と出仕とてせしめみち

秘 兼國源のしほつらつらいのもつ勝月夜の人

何 尚侍退

或託口九條殿二君尚侍娘子永延元九月十日任

尚侍初冬春宮有寵長往之間雖侍青園私与彈

正大淵頼之朝臣 許後其後御覺退出

秘 二条の

秘 勝月夜はつて此妾子なれ

せらふまゝもゆ

秘 二条の熱切は弘徽殿へ朱雀へ

系内

つらつらある女御みやもあつた

秘 女御更衣れとてあるれ

勝月夜とて系内せらつてしるる

秘 勝月夜とてしるる改のらつてしるる

又朱雀のに弱なる御ん

秘 ねむり

秘 松前使長つたの御家とてふつた人

下女官とて此職あつた

有つて仍大をげし海の

又これ

秘 此

秘 此高代の改のみ

秘 ねむり

秘 兼國尚侍の

秘 此勝月夜内

秘 此

秘 此

ともあり

つみしりし清のまひの若く

勝のあつて朱雀の御家ありし人まはるれ
名をこきて又やうふれはつた時なるも
まひりしあつたれ又しよの御家ありし
人のまはるる人のまはる勝のまはる
るよりれし御家ありし有まはるる
らまはるれみとのまはるるあつた
うまはるるあつた
みとれ御家ありし勝のまはるる
らまはるるあつた
はのまはるるあつた
御まはるるあつた

朱雀の御まはるるあつた勝のまはるる
ありしつるあつた
はの御まはるるあつた

美園朱雀の御まはるるあつた勝のまはるる

はの御まはるるあつた

御まはるるあつた

美園御まはるるあつた

美園御まはるるあつた

美園御まはるるあつた

美園御まはるるあつた

美園御まはるるあつた

美園御まはるるあつた

美園御まはるるあつた

あつしつゝをぬく

朱葎の御さるる

之秘ん 行る守

勝月東に ずま回

多少 勝の心 しくく 祈る人

世中 しくく 祈る人

かしの心包

義團のこの注記 年ノ行 せし 申すは けいめい

ゆり 知 しくく

用と世中ノ心 けいめい

く しくく 世あん物

新中 御心 けいめい せされ あり しくく 祈る人

から しくく 祈る人

い しくく 祈る人

勝上 對 しくく 祈る人

ち しくく 祈る人

松原 けいめい しくく 祈る人

源のつゝ けいめい しくく 祈る人

い しくく 祈る人

けいめい しくく 祈る人

平 しくく 祈る人

朱葎のけいめい 祈る人

花 しくく 祈る人

けいめい しくく 祈る人

かよ しくく 祈る人

松云 丹詞 花の 祈る人

しくく 祈る人

しくく 祈る人

しくく 祈る人

あん しくく 祈る人

内依の しくく 祈る人

朱葎乃 あん しくく 祈る人

もよなきはくはるはさうり

ありやいつは

^秘卿か 彼の御初にいつ卿多めり深の

^秘美田米雀ノ命ありしは

そのの後にちりつる後の日とありし源ゆの後に

りし源ゆの後に

今にちりしらのまき

年米雀院に

^秘美田勝了卿子

もと勅定之此時

御殿

東宮

東宮を米雀院に

と相壺帝の御進言あり

よ

^秘此春宮を除く

造意之宇治よ

ありて中し淮南分王と

と謀及の心あり

ん

^秘美田ハ字

此の世のあり

そ候り

私抄出

は

心

^秘世の

世の

あ

二

に

いと

いと

所一の法よりうらまはるるまじきこととて
 ありまじき法よりうらまはるるまじきこととて
 此の法よりうらまはるるまじきこととて
 まじきこととて

秋の二段のまじきこととて

秋の二段のまじきこととて

秋の二段のまじきこととて

秋の二段のまじきこととて

秋の二段のまじきこととて

秋の二段のまじきこととて

秋の二段のまじきこととて

秋の二段のまじきこととて

茶々二人釋有疑 續古今集并十卷

此の國を仰ぐよふあり侍りたる時より侍りたる中納言の
 旅人より侍りたる時より侍りたる中納言の

天曆御時の屏風等 忠見

秋凡の宮次なる友あり侍りたる時より侍りたる中納言の

續古今集二の國を仰ぐよふあり侍りたる時より侍りたる中納言の

興行平旅人の侍りたる時より侍りたる中納言の

侍りたる時より侍りたる中納言の

侍りたる時より侍りたる中納言の

侍りたる時より侍りたる中納言の

侍りたる時より侍りたる中納言の

侍りたる時より侍りたる中納言の

侍りたる時より侍りたる中納言の

侍りたる時より侍りたる中納言の

侍りたる時より侍りたる中納言の

若菜トニ
 ラ山ナニラ
 五七リ此作若
 葉トナリ実
 文時ニ此処
 花多ニ委細
 註

文の記と本とをくみくみして後を面する者
くみくみ水原秋

私屏風の面のり 諸砂、沙汰を 此義くわそ
所伝とらる及いふるわらん

人ののりきこ

私若世美とあるより 山寺いふは寺をりつて

あつてのりはとていふるるる 日巻人の國を

よはる海山のりはは可くを即後ををを傳い

繪いこくまもせ給えとあり 此巻の次、初、傳も

ついでいふるより首尾おるをあらわす

私に伝るるいひをや山寺も人とのりは

三平つて山寺もその字か

若世美といひいふは之のりはとてを給えと

英用も若世美といふは之のりはとてを給えと

けいををるるは改のりはとてを給えと

若世美といひいふは之のりはとてを給えと

源の傳りつるるのりは及もあつて

いふるり上とてにせりるるは枝つゆのり

千枝常則 左高名録 共以畫工

應和五年四月九日所記 台右木門志苑鳥常則圖

畫西相南壁 白澤王像 常則名字天曆所記中

子枝常則皆傳師也 名在

英圖此所分の傳り也 魚圖尋人 日本のかうの

名人といふの傳りあつてを 高名録といふ

伝くりあつてを 高名録といふ

作繪 新核樂記

つくりあつてを 高名録といふ

此のりはを彼輩といふを 高名録といふ

採色畫師の口傳あり

源氏の書りてを 高名録といふ

然りてあつてを 高名録といふ

源のりはを 高名録といふ

秘 源のりはを 高名録といふ

秘 源のりはを 高名録といふ

いふは此後をいふてうそをいふ事なりと云ふは可
海況いふ事なり

義田作作作世人にいふ事なりと云ふは可
仙源云何れをいふ事なりと云ふは可
て海のいふ事なりと云ふは可
と云ふ事なり

心りし事なり

なりし事なり

源の事なりと云ふは可

いふ事なりと云ふは可
一七五
多し事なりと云ふは可

見さいり花文

義田あは出ふつやりなりと云ふは可

海うなりと云ふは可

義田あは出ふつやりなりと云ふは可

なりし事なり

義田あは出ふつやりなりと云ふは可

白後の御衣上世荒花文なりと云ふは可

白後の御衣上世荒花文なりと云ふは可

河海上白子後乃御衣上世荒花文なりと云ふは可

いんよ相違有へりしをわらふはあまのつねにわたりて
たここほりゆくわらぬ衣衣の衣衣地へ平納の衣衣
ふせもわれ衣の世に四年終ふりて月をては
たつていふのこきとらじやつたつていふ

弄 花をいふあーあつてつたりつたり日ん
花をいふ可也 平納うて衣の年終は他を花四世ヨキタルこと
濃たマキキヤサ子ノ云

秘 三気自筆ニテ彼云加へ仍と云来流々

こほりつら
秘 久の浪き

とやつていふつていふつていふつて
何尺迄年尼佛弟子 某婦令頂礼白佛言支喜提道樹
之月歎德沙羅之愁雲尼連禪 何之水音咽鼓
提之浪浪 本朝文粹願文
ゆきつていふつていふつていふつて
後急火川と付

秘 金剛佛子集をいふつていふつていふつて 弄日

愛用やつていふ精進よつてあり又一切衆生悉是吾
子ト法を説く二巻 品にあり 仏子ハ口説の片子
かれい倍して内 口内ノ優遊塞なり
秋のまはせをうきつていふつていふつていふつて
中子といふ

ゆきつていふつていふつていふつて
夢守をいふつていふつていふつて

おきつていふつていふつていふつていふつて
船中をいふつていふつていふつていふつて
棹唱歌をいふつていふつていふつていふつて
りつていふつていふつていふつていふつて

秘 舟をいふつていふつていふつていふつて
弄 雁陣易迷秋嶺と 鳧舟難弁夕陽中 此詞ノ心
何 よつていふつていふつていふつて
鳥船をいふつていふつていふつていふつて

日本紀曰渡生神名鳥之石楠船神亦名謂天鳥船神
次生鳥船椽樟船神

彦火々出見尊御哥

おきりしりしはく志由よりねしつとねれよあど
よばくろしりしとひの鳥の名に舟をもひそく似そをわらふと
わかろくよはり詩よと鳥舟に仙舟もつとくし
と一舟つとねれよあど

おきりしりしはく志由よりねしつとねれよあど

かりりつとねれよあど

雁渾舟迷秋嶺上鳥舟雖并夕陽中けるけり

私に此詩曰くも此二品のしりしりつとねれよあど
けるを引とらねれよあどやあのらとねれよあど
鳥舟にりつとねれよあど雁陣

鳥の舟を

雁渾舟とつとねれよあど

梶の舟を

くらこの舟すしよ

義同廉相なる念珠の形も玉のしりしりつとねれよあど

人の心

くらこの舟すしよ

原の舟すしよ

又言する人よあめぬ

くらこの舟すしよ

くらこの舟すしよ

くらこの舟すしよ

我為迂客汝未賓共是茶之旅漂身歎枕思是帰古

日我知何歳汝明春 用雁 菅原後集

私此詩引よ及りし

花
友をうらやまの初ちうんて考う
平
厚乃つゝまはる友とまじりてはいるんとは
わらふ乃友とまじりてはいるんとは
母
友とまじりてはいるんとは
すまそは傷草のわがたうん
私平ノ友は文の書法よるりてはいるんとは
てまじりてはいるんとは
丁々まはるんとは
ノ友は

おやのひらきか
平
源はうらやまの初ちうんて考う
平
右近のせうの父の事
紀伊守の事
松やうの巻の巻
伊と介とわらひてはいるんとは
さるあつた又の事
桐壺御門前御次ノ年常法分ニ包せり

こういれ
。あつたあつた文字ノ源は巻にわらひてはいるんとは
は右近のせう親類兄やうとまはるんとは
節ノ人こそわらひてはいるんとは
志しうらやまの初ちうんて考う
つれまはるんとは
右近の忠、親類を丁々まはるんとは
恵らうんとは
わらひてはいるんとは
花をまはるんとは
をまはるんとは
月のやうなわらひ
松定家といひてはいるんとは
く月のやうなわらひ
をまはるんとは
らうらうらうの月がうん

菊すそこつとしをうらりしつり物に

すそこつとしをうらりしつり物に

入ぬりし 平原の月とどめをいれしつり物に

秋人のししをうらりしつり物に

菊すそこつとしをうらりしつり物に

月とらんるはるの懐懐とけりしつり物に

月とらんるはるの懐懐とけりしつり物に

月とらんるはるの懐懐とけりしつり物に

月とらんるはるの懐懐とけりしつり物に

うらりしつり物に

菊すそこつとしをうらりしつり物に

いしつり物に

林巻とつり物に

院うらりしつり物に

朱巻の桐壺とつり物に

いしつり物に

何去年今夜侍清涼秋憶詩篇独断腸息賜御衣

今在北侍持毎日拜餘香 後集

私云是取廟亭符とて七年内裏とて九月

九日とて是は透逸の詩とけりぬて執録と御衣と

ぬりしつり物に

多しつり物に

つり物に

御がいぬしつり物に

朱巻の桐壺とつり物に

なれしつり物に

なれしつり物に

大貳

元権官 相當従四位下 唐名都督大卿

近代例多以冬議散二三位等任之非冬議三位又有其例有權帥者不任大貳任大貳者不任權帥惟其謂己為流例多是以名家人任之

以下畧之

五節の父は花散里末、五節君は源氏有はゆき

不家いひらくむらりらに

類廣

私五節君の女兄中あまうある人

小乃のい真まき **葉下大貳の妻**

私女とわらふ真まきのりらる人

うらけらわやまきつらる人

葉下道遠つらる人

わらわらわららる人

葉下ははれわらわりのゆきまき道遠まき

よ源のうらわらまきまき

わらわらわらわらわら

大貳の女と五節君の兄中わらわら

よのうらまき

葉下道遠つらる人

五つられ君ははる人

葉下源ははる人

まきのうらまき

葉下源の琴を弾やらる人

不乃は人の御介

不乃は人の御介

を弾やらる人

大貳の源は音信

お武の足もとに海を舟に作らば高橋の
いそ

ふみまわりのうらり

流るる御

わたり御あつたぬ

頃の懐徳のさむくお武うらり

むすのうらり

舞今の世に

狂

秘極

おせら

お原

岡

君

私

ま

の

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

口つらとほろほろとくらくらくと
るしつらとくらくらくと
正侍とくらくらくと

故事とくらくらくと
原氏の所方とくらくらくと
ふつとくらくらくと
名を義別

月
團てお節とくらくらくと
くらくらくと

如
平廓の山向に海とくらくらくと
くらくらくと
くらくらくと
くらくらくと
くらくらくと
くらくらくと
くらくらくと

○華園のうらむ驛長とくらくらくと
くらくらくと
くらくらくと
くらくらくと
くらくらくと
くらくらくと
くらくらくと

みやくらくらくと
原のうらむとくらくらくと
くらくらくと

春まわらむとくらくらくと
くらくらくと

命ぬのまわらむとくらくらくと
くらくらくと

○華園のうらむとくらくらくと
くらくらくと
くらくらくと
くらくらくと
くらくらくと
くらくらくと
くらくらくと

御しつゝのみ

お原の先中や

おれらう文と法らうらう

。第回作也 却のそしきつゝとよみ待をてり

らし 後つゝそれ申すはれは待をいし後のく

ア後つゝさしきつゝとよみ待をいし後のく

つら後つゝ東披をいしやのよみ待をいし

ささいのや

おは徹版

おはやけのうらうらう

お助あし 助助とつて

。第回をぬる家とら此後名とつてけりしは

考辞 早ノ助あし

お助あし

お助あし

。第回原のすも

。第回原のすも 後作の脚とて西のく作らる

ておらうらうとてのつゝかうなるとておは

とらと馬といひく人の

何史記曰趙高欲為亂也群臣不聽乃先設駑特麻

鞅於二世曰馬也二世笑曰丞相誤耶謂麻為馬何尤

右ハハ然或言馬以阿項趙高或言麻高因陰中諸

言麻者以法 秦始皇本記

。第回高し 見り趙高の乱とてにさむとて

。第回高し 見り趙高の乱とてにさむとて

。第回高し 見り趙高の乱とてにさむとて

。第回高し 見り趙高の乱とてにさむとて

。第回高し 見り趙高の乱とてにさむとて

。第回高し 見り趙高の乱とてにさむとて

。第回高し 見り趙高の乱とてにさむとて

。第回高し 見り趙高の乱とてにさむとて

解りし心つらきりそとるまじ

あんなにのやうに

ふらふらふらふらとわらふ人直さふれり

君乃枝の髪とよん

胡前一声霜後夢漢宮万里月前鵬 王昭君朝認つ

伴行尺ふ血此後と痛し後とつらとつら平和玉と

尺可り憐れし詞も胡のくくつらむん女とあふ

下ろくとあり玉昭君も也 較胡前一色 一 昇月

。案同胡前胡回ノ樂器ノ角加ノまろり

或抄胡前一色霜後夢漢宮万里月前鵬若贈黃

金路定身終身帝王 王昭君 胡認作

月つとあり

因去月分鵬とつら

おくまうくはるし

。案同後漢中海いたくありらぬ也

ゆづらつ夜ふらとやとと

彩のうらとつら海面白し故これ詩と終夜床底見

青天とつらとつらとつらとつら

多しとつらとつらとつら

。案行南を鷹一斤西傾日 伴行尺 奥入云末助

今案尺云ふ不明

。案彗星桂芳半且四三千廿界一周天

天廻金鑿雲將雲唯是西行不反塵 菅原氏月各

弄 天廻云 一 常月の力とつら 一期月 西へ行て東へ来

しとつら東へとつら

。案 天廻 一月此行とつら

中右左と東とつら 玉鑿とつら功とつら

。案 案 案 日月の西へ行し是右に大クルし不反塵と菅原

の天廻の右に大クルしとつら ちむ七左近の朝とつら

らわ新

松列元甫の詩

題世書

世事不存莫莫嘆試看日月在青天一假造化却
相皆日月右旋天左旋

日月之右之左天左之右之左造化之右之左
造化之右之左日月之右之左

西一行之右之左旋トイフタテ

いほく此中我も我もいほく月を人といはば
如くは左旋トイフ

或抄月之右之左旋トイフ
いほく月之右之左旋トイフ

転世義之何

秋のまゝとるまれば
又原友多有りりあたまはく
弄ありと原也又都の人よ
如原句有りりあたまはく

亦時ありて有るを

業因が子多ふいと飛らうと又やう群を
わたくしと身の上ようと又群を

又かきく人ともはれし
人といはれしはれし

業因希有るを

如くは左旋トイフ
如くは左旋トイフ

如原の如くは左旋トイフ
くのとあれはれし

あしはれしはれし
も目下紀よまの大地の

結 入道乃小すよこしつて

まゝ老よこしつて

明石との女入道の小方

まじりつた乃交交の所

私としり小方

● 善因寺の深く入道の娘成をよこしつて

漢三祖の呂公乃女とよこしつて

あこ乃の

行 各子の宿世

秘 入道の小すよこしつて

母あふ

明石との女乃初

ん

原の

今乃の

● 善因寺の深く入道の娘成をよこしつて

しりの白文文集にハ十一所集とあり

かゝりつて

つこも

かゝりつて

りつて

史記に本紀曰呂公曰臣有息女願為季箕帚妾酒罷

思媼慈呂公曰始常欲奇此女与貴人沛合善云来不

与何自妾与列字呂公曰此非兒女子所知也平与劉季

呂公女乃呂后也生者惠曹元

入道の腹をす

えりつて

長乃つて

● 善因寺の深く入道の娘成をよこしつて

と

こふんをいふ
内いさやうの同言をいふ
こふんをいふ

入石の作

しつぱんしつこせり
内と用せよと此方より又いふつらんよんをいふ
しつぱんをいふ

おとめをいふ

乞ひりぬきぬのり

多田源の罪をいふ
そかまはるをいふ

いふ
そかまはるをいふ

いふ
そかまはるをいふ

いふ

入石の作

いふ

和漢を罪たるものた近乃創始なり

伊豫物語よりいふ

予歴覽古今歌詩自風騷之後蘇李以還次及統新徒

於中文政於外故憤憂悲傷之作通計今土什八九世

所謂文士多敷奇

詩人尤命薄於斯見矣

漢家本朝其例多也

野相公在納言管家西宮尼府帥内大臣以下拔群賢文

無罪赴配所ら月人不可勝計

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

秘進助
ト君字係
ヨシムネ
ト君字係
ト君字係

うききりて
松と葉の流るる
はる道すらん
世系極、具我
うん

又和しのしぬ者よといはれとてしりあひははれ
いりあひる者さわりとてしぬ女更衣い入るる神文の極
大納言女さし中然しある事さうかといひさる
多し此女御業乃新設に遠ら決りて

祇

桐壺更衣と明石入道といふこと

桐壺乃文衣乃源氏君のやりたらし可と侍らる所子
とうこそははれぬるといひたりしりよりて女君領解
とせんこと

大臣

入道播磨守

明石上
明石入道

梅峯大納言

桐壺更衣

源氏の御女

手桐壺更衣乃父の明石入道のよりて大納言の女のさし

ひかり後さるえりてしりて

いとわらわくわら

祇

桐壺衣乃御

いりて

桐壺入道乃御の御合しりて相合との御事

こり君さしり

文衣いせぬれと源氏君さるわらわは遠にけんあ
りていさる

女

源の女い男いものもいひはなれりあつあつあ
わらわ

かみり人かわとわらわは

源の女いさる

桐壺のさるいゆりあつあつあ

こりわらわす

。葉守といふわらわは

りてわらわも明石上の御

身れわらわは

明石とれん

。弄葉同日

くらがしつもの

我々のありはらうとらうたるをなすべしとての族姓に

つねに後を継ぐべしとて

かたきつをいひ

我々のありはらうとらうたるをなすべしとての族姓に

つねに後を継ぐべしとて

かたきつをいひ

我々のありはらうとらうたるをなすべしとて

かたきつをいひ

我々のありはらうとらうたるをなすべしとて

かたきつをいひ

我々のありはらうとらうたるをなすべしとて

我々のありはらうとらうたるをなすべしとて

我々のありはらうとらうたるをなすべしとて

かたきつをいひ

我々のありはらうとらうたるをなすべしとて

とほよい年りくつり

源氏サシのヤと 平

うへーわつたわらはらう

。愛用はらうのしつとれとて

同をいひはらうとらうたるをなすべしとて

我々のありはらうとらうたるをなすべしとて

とらうのしつとれとて

日あるくつとれとらうたるをなすべしとて

二月廿日あり

。我々のありはらうとらうたるをなすべしとて

我々のありはらうとらうたるをなすべしとて

いあしとて 我々のありはらうとらうたるをなすべしとて

。我々のありはらうとらうたるをなすべしとて

我々のありはらうとらうたるをなすべしとて

我々のありはらうとらうたるをなすべしとて

況乃御なり

相成らば、その時、位乃時を、後、院に成ぬ、いふ、よ
うらの、人の、秘、内、未、在、の、春、を、いふ、ま、し、く、所、に、い
乃、た、し、未、在、を、在、家、内、い、ま、あ、り、く、あ、し、つ、れ、と、今
の、こ、と、な、れ、る、こ、と、い、ふ、

わう、く、れ、ら、う、を

^和ちの、は、な、れ、る、こ、と、い、ふ、あ、ら、は、

。あ、り、ま、し、く、文、字、活、り、れ、る、の、こ、と、い、ふ、町、の、中、に、
皆、所、廟、乃、と、成、下、し、く、こ、と、い、け、り、内、年、に、い、り、し、何、時、
文、字、の、こ、と、い、ら、る、に、偏、執、し、ま、あ、り、る、を、い、未、在、
と、源、の、こ、と、い、ふ、に、い、て、い、つ、う、あ、ら、ん、と、い、ふ、

^原い、れ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、
^和い、れ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、
^和い、れ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、
手、を、要、す、と、い、ふ、の、こ、と、い、ふ、

松二月廿〇日ありの昔れ、記、室、日、何、様、の、こ、と、い、ふ、
と、あ、り、ま、し、く、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、

や、あ、り、ま、し、

大、と、い、ふ、三、位、才、也

。第、四、巻、と、の、見、申、後、に、致、仕、を、い、ふ、た、也
い、ふ、に、寧、相、す、

今、い、ふ、事、お、申、お、い、ふ、こ、と、い、ふ、

地、の、あ、り、ま、し、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、
三、位、才、也、の、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、
い、中、科、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、
つ、ら、に、い、あ、り、ま、し、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、

よ、の、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、
。第、四、巻、か、よ、大、師、の、あ、り、り、り、。若、た、る、を、い、ふ、こ、と、い、ふ、
か、し、く、い、ふ、こ、と、い、ふ、信、近、義、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、
こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、
い、中、科、の、あ、り、ま、し、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、
つ、ら、に、い、あ、り、ま、し、と、い、ふ、こ、と、い、ふ、
寧、相、乃、其、の、原、由、を、い、ふ、こ、と、い、ふ、

供所をよれをるるつたる物くあつたりてはよ
とらふしつちわくはつたつた

あましと乃ちわわしつりつ物

飛食つりつりつ物のつらつ物く或海津物能國言

在物海人のつらつ物とあつりつ物

新海の物に信がらつら

手貝ふつらつりつら物

國去貝ノ物又海つ物し

或抄日本紀海物蟹廣物蟹扱物磯物ホアリ

新海物貝ノ物に蟹廣物にしノホアリ魚

蟹にしつり蟹扱物にしノホアリ磯物磯物

魚にし九禅貝海津物

つらつりつらつら

つらつりつらつら

つらつりつらつら

船舟の申波の底を考ふる海生のつらつり
つらつりつらつらつらつらつら

わあつらつらつら

華國海生の物子種をばつらつらつらつらつら

つらつりつらつらつらつら

わあつらつらつらつらつらつらつらつら

わあつらつらつらつらつらつらつらつら

わあつらつらつらつらつらつらつらつら

わあつらつらつらつらつらつらつらつら

わあつらつらつらつらつらつらつらつら

わあつらつらつらつらつらつらつらつら

わあつらつらつらつらつらつらつらつら

わあつらつらつらつらつらつらつらつら

わあつらつらつらつらつらつらつらつら

わあつらつらつらつらつらつらつらつら

わあつらつらつらつらつらつらつらつら

わあつらつらつらつらつらつらつらつら

海や寧ろ君の海人... 地ろけ後... ありぬ

いさかしいわれ

地ろけ後... ありぬ

見をくさるるん

金やれをそそ

手練をい

葉國編七... 似合

か... 編

は... 有

あ... 有

を... 侍り馬

ふ... ありぬ

秘葉國日... 手回

り... ありぬ

葉國夕... ありぬ

か... ありぬ

葉の父... ありぬ

あ... ありぬ

は... ありぬ

つ... ありぬ

か... ありぬ

葉國原... ありぬ

あ... ありぬ

ふ... ありぬ

葉國子... ありぬ

ふ... ありぬ

運返しとて強らねと

しと申り

申りく名孫のしとて申り

ふいのつらしとて申り

醉悲淡瀟春盃裏 樂天

花自樂天の江州へ在任するに 丙三月廿日 東後といふ

所をゆりて元徴之よりつらしとて申り 昔のふとれ

をいふ三位中納言源のつらしとて申り 此詩の心と定家の

てらぬおもしろしとて申り 此詩の心と定家の

歌のうらやましとて申り

しとて申り 此詩の心と定家の

不天の詩付海よりつらしとて申り 此詩の心と定家の

あいのつらしとて申り 此詩の心と定家の

行 十一年三月廿日 別徴之於濃と

十三年三月廿日 別徴之於中 停舟夷陵之宿 別

言ふべきをいふ詩 七言十三句

一別五年方見面 語到天明竟不眠 生涯共寄蒼波

御國俱拋白日邊 往事那言都似夢 旧遊零落半皤泉

醉悲泪瀟春盃裏 吟苦更願曉燭前

樂天 稿所より元稹よりあつて 此詩の心と定家の

まの亭の中ねの對面よりつらしとて申り

和 三首 詩の面白しとて申り

とて申り 此詩の心と定家の

生涯共寄蒼波とて申り

かりとて申り 吟苦更願曉燭前よりつらしとて申り

とて申り 此詩の心と定家の

とて申り 此詩の心と定家の

とて申り 此詩の心と定家の

とて申り 此詩の心と定家の

とて申り 此詩の心と定家の

とて申り 此詩の心と定家の

征 わりくくしの別

美園亭相の信乃人と海にさかぬ人

わつ社てわつら 帰原

うらをいけれぬまうゆらまうしやまにらり

美園義いわ

我わ辻客汝来賓共是兼旅漂身歌枕思量帰

去日我知何歳汝明春

そい共官家来原をすて作りぬつ詩人只今の思れ

とんいふや木原の明年ゆつこいこやまら

まら共今ゆ原をすてかきあらはあし

ゆい一 弟田よきとひかり

松只今亭相中宿の形とこい帰れぬをゆらの終

いねいよこいゆのこやこい

きしらそんらや

古心りゆれといりれぬ

わりのは原乃こいゆ立りれぬの形とこいやゆ

弁

三位中宿の言ふ村の原れやうに高只世時のこい

をうらぬつこいりや原をりかこいかり

号り面原とららこい

国は号番皆村のやこい但ふうれ原宿のま

い

りあつと原とこいやうり号の白原とら

只今うやうとを言ふてい文と形とこい

或抄原と原とこいこい原とこい

い

さうつと外り

亭相中宿のこい

わうこれ君のこい

美ゆさかたると謝らる原宿

くあこい

うらにわりてす升のゆらいつあけやうこい

わりの原のうらゆらわう君と原とこい

い

ゆしうかちされぬきれと

源は左近の人なれいひしきくかひんし

見よあさりていひくあをるをれい

胡鳥嘶は風遊鳥巢南枝 弱かりし胡國なるは

水仍ふあされは田里をいひわたりしあをる

け 胡子嘲水凡 志をさるるなり 半日

。若同趣の而國は仍多と南枝上巢ぐるは 胡は水國

仍鳥は水凡に古をさるるなり 源の河上をさるる

又ふとさるるはくつらう されいひのぬき

よたわりしきげあふぬ

獲るといひ

くまのくまぬあふと

。若す飛鳥をくすま司 私に帝の中ぬの原へまねる

ん他つしき流の若かりしひふあしとまりとわれ源

よりと帝と飲まじり流くるんは行

かまふしんぬん

。笑用是はまにすすま日

糸ふはわれしるは源のりのはり地帯の中ぬりの

あななるしきさるるぬくるをんは

日なりしきあり

決東まじりあふたあしぬそりのはあつるて若

あを柳にわりはくねぬくさは

えはくりぬくしきちり

又いよかりしきちり 誠ありああるしき

いほふさるし

源の詞

。笑用是より宰相の詞しきんきんいらしき

しきしきしきしきしきしきしき

さうしきしきしき

源三信の中ぬ詞しき しかり又よりりしきしきしき

源

すちらしきしきしきしきしきしきしきしきしき

三位中ねとひしよとていふは

神 鶴く三位中ねとせしりしりて井からうらみ

あつこと我をたつる罪は多し力にたり

○兼用下らうくまふらうく知事罪シ知後おと

兼用下らうくまふらうく知事罪シ知後おと

神 神の罪すい力よとていふは

昔らもものこちちんいれらうく正廟なと

○兼守漁内之罪安すまねとていふは

かたなりあちんいじりのことた人に

○兼守伝罪ありて聖廟をていふは

平家ノ中におあるきり又とていふは

平家ノ中におあるきり又とていふは

邪のさうのを又とていふは

そま力あるれとていふは

神とていふは邪をえとていふは

返り

た

又

神

○兼守病をりていふは

源沈

神

○兼守病をりていふは

源沈

神

三月三日
 桃の花
 下之水
 流
 上
 巳
 日
 官
 人
 並
 禊
 於
 東
 流
 水
 上
 續漢書禮儀志云三月上巳日官人並禊於東流水上
 文選曰於是暮春之禊元巳之辰方軌齋軒禊于
 陽濱南都賦

漢代三月上巳日百官東流水上禊禊飲也
 自魏以後不用三日不用上巳續齊諧記三月
 上巳風俗通云紫之園祀女巫堂歲時以後除疾
 病禊者紫之故於水上繫紫
 郊國俗三月桃花水下上巳以上巳漢有二水上巳
 于執蘭葉招魂魄續魂魄後除不祥韓子
 成都記曰三月三日遠近祈福於龍橋命曰龍橋市王
 羲之三月三日蘭亭序云永和九年歲在癸丑
 暮春之初會山陰蘭亭修禊事也三日書
 白樂天用元二年三月三日洛濱宴詩十二韻在之

硬注同く
本抄三十一巻
三十一巻
三十一巻
三十一巻

けつろくありとゆある

○第廿三月初三日月ありてはとこをさし

海つらぬのありてはとこをさし

海つらぬのありてはとこをさし

軟障有蓋高松也 謂高松軟障 堂立軟障堂下

引慢 又堂下有立軟障事 せん

新儀式曰内宴日 收樂出自後綺殿軟障南著座

軟障はつらぬ障子ありのつらぬ物也 假名よせ

一答軟障トカク幕やうに物ニ高キ松ト繪ニカキテ壁ニ

テリシ 中敷やうに物ニ高キ松ト繪ニカキテ壁ニ

美すやうに物ニ高キ松ト繪ニカキテ壁ニ

とのぬい御の風ふらふら

今のはに... 風雨のまをわら... 源の只今... 御の... 年日

松若忠相... 七日... 王... 御... 年日

ひらり... 神... 但日本紀大兩

ひらり... 御... 神... 年日

ひらり... 松雨の用... 年日

ひらり... 年日

何暴風卒起屢降惡雨由王暴虐不修善事 全光明經

尚書曰武王既喪管叔及其群弟乃流言於國曰公將

弗利於孺子周公乃告二公曰我之弗辟我無以告我先

王周公居東二年則罪人斯得 周公告二公遂東征之以二

後公乃詩以貽王名之曰鴟鴞王亦未敢誦公曰秋大隗

未獲天大雷電以風 二年秋也后蒙恒凡若雷 未則尺偃大木

斯拔邦人火恐 凡災所及邦人皆大恐 王與大吏凡年以啓金滕

之書乃得周公所自以為功代武王之說二公及王乃向

諸史與百執事對曰信噫公令我勿敢言王執書以

泣曰其勿穆卜 金滕篇

漢書曰君霧恒風若 師古曰凡言恒者謂所行者失道則 塞暑風雨不時恒久

海はわたりてふもをきりてんやー光みらる

ね彼の白きと不弄日 弄花鳥 電光

道成集 女流の夢より言れしりてしる

よれとみこと作しりてしる

年しりてその物とてなうとこつしりてしる

是家つ明月記云西脚駐地電光張念

非るりしりてかからるる

電電のつみきさぬ

るる非の身は人のりてと云ふよ家枝

かみりてしる せはのつみ

に せりてしる

ね せりてしる

く せりてしる

ね せりてしる

と せりてしる

。 せりてしる

何とやんけを

君の9やうな

深の祈

朝のらうるま

おけ風のりおれどらうつるま

ふゆかたつ物とらん

いづれはまよらうるま浪風もらんたしりて子地

いづれはまよらうるまみるるれてそんあしゆ

いづれはまよらうるまみるるれよけり再

それはまよらうるま

葉は海の夏れ新くしらさうるま

まらうらうらわらうら

おれまよらうるまのりてはま流り

おれまよらうるまのりてはま流り

おれまよらうるまのりてはま流り

おれまよらうるまのりてはま流り

まのまよらうるまのりてはま流り

御北西義行決す

彦火と出見尊釣らうらうら

る孫らうらと孫外顔容絶也

しよあ豊玉姫よあしやうらうら

てまらうらうら

又日武尊東夷と何 孫対相撮

孫とけりま孫外わらうら

けしは浪わらうら

のい命よかまらうら

孫と上野回確居坂少く東方と望

吾婿かまらうら

天平勝寶元年遣唐使中有副使陸奥

佐上玉牛人丸山城使生上道人丸者

有入唐之時号若八前輩今混合

於海中為海神被取端正

見作年丸記

にしろらん

源のんし

さばはるなれ

さばはし 彦太く 出見するを けり ぼんやう

まうらて なるの 浪風の さうた あり

ふれま さいふさうかほ

松わー のうらうらい と だんま

○ 葉国月

弄奥く ぶん分

あまの 神はな

匠者 明非と して 又 海非

と 此 在 所 あり

八百 會 日 中 凡 八百 守

さば 海 の 伸 け 終 乃

弄 彦太く 出見 する 凡 不 の せ 年 りの 浪 舟 と あり

あまの 街と して 彦太く 出見 する と 海 中 あり

あまの 船 あり せ ち あり して 後 千 珠 漁 珠 と あり

あまの あり せ ち あり して 後 千 珠 漁 珠 と あり

おほや せ い して あり して あり して あり して あり

日の け と して あり して あり して あり して あり

一 劫 平 流 未 考 して 念 念 念 念 念 念 念 念 念 念

の 照 候 候 候 候 候 候 候 候 候 候 候 候 候 候 候

か け け け け け け け け け け け け け け け

かゝりの清らきしきしきにて
平浦のうらみしむ長指費の地れりし 又悔れ
む長身齡よりりてうらみあはれし先づりて
し指費とむりりてあはれの深原あり



